
壮麗の月

蓬餅あんこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

壮麗の月

【Nコード】

N3174T

【作者名】

蓬餅あんこ

【あらすじ】

人間をはじめ、エルフ、ドワーフ、ドラゴン…他にもたくさん
種族が暮らす世界で生きる一人の少女の話。

はじめに

この作品を読む前に

- ・ 作者は初心者です。
- ・ 標準語は日本語じゃありません、が面倒なので日本語で書かせていただきます。
- ・ 更新は不定期です。きっと亀更新だと思います。
- ・ 世界設定は適当です。矛盾あるかも…いえ、ありますきっと。
- ・ 設定にゲームや本等色々参考にしています。
- ・ 書きながら考えるタイプです。
- ・ ちまちま訂正が入ります。大きく訂正したときにはあらすじあたりに乗せときます。
- ・ その他、たつくさんおかしなところがあるでしょうが…温かい眼で見守ってやってください…
- ・ 誤字やおかしくねー、というところはバンバン指摘してくださいとありがたいです。

はじまりのとき

なんて強いのだろう。

そう、思った。

泣き出しもせず、怒りもせず、ただまっすぐに見つめてくる少女は凜としていて、思わず言葉を呑んだ。宝石のように美しい紫と赤の双眸は強い意志を感じさせて、輝いていて　　：ずっと昔にも、こんな同じように感じたことがある。同じように瞳に輝きを宿す者に会ったことがある。どれくらい前かわからないくらい、昔のことだ。どうして、こんなにも輝いているのか。昔、思った疑問。未だに答えは出ていない。

どうして、こんなにも　　輝いて見えるのか。

「他に何か聞きたいことはありませんか」

先刻、言い損ねた言葉を言つとその少女は怒つたように眉を吊り上げた。長い黒髪が少女動きにあわせて揺れる。

「さつき、『ここで起こつたことは全て忘れてしまいます』とか言つたでしょ。聞いても意味がないじゃない」

少女の言つとおりだった。

これから起こるであろうことを話しても意味がないのだ。忘れさせなくてはならないから。けれど、話しておかなくてはならないと漠然と思つた。何故かは、わからない。

無意味な行動をしたのは初めてだった。

「そうですね。」

結局、なんのために此処に来たのか、わからなかった。この少女と会うことに意味はあつたのだろうか？此処でやることもない。ならば戻らなくては。やらなくてはならないことはたくさんある。

「貴方に幸あらんことを」

もう癖のようになっている言葉。かつて言われた言葉。今、少女

に対して言ったその言葉に何の意味を込めているのか、それすらわからないのだ。

踵を返し、空に文字通り飛び立とうとしたそのとき、呼び止められた。

「ちよつと待ってよ！」

振り返ると少女と眼が合った。まだ何かあるのだろうか？言うことは全て言っただはず…

すると、少女はびしっ、とこちらを指差してきた。

「人の名前知ってるくせに名乗らず去ろうとはどーいうことよ」

何が言いたいのだろう？

予想外の言葉に困惑していると、少女はにっこりと笑う。「こちらの困惑に気が付いていないように、あっさりと言った。

「あなたのお名前は？」

名前？

わからなかった。この少女が何故そんな質問をするのか。名前なんて聞かれたこともなかったのだ。そもそも…

「在りません」

「アリマセン、さん？」

「いえ、そういう意味ではなく…」

名前など存在しない。呼び名ならいくつか例を挙げられるか知れないが。

すると、突然少女がええっ、と驚きの声を上げた。何かおかしいことをいったらどうか？

「ないの？名前が？」

「はい」

肯定すると、さらに変な声を上げる少女。一瞬頭を抱えたかと思えば、すぐにこちらを見て、何か考え始めた。嘗め回すように上から下までみてくるので、何がしたいのか、と言う疑問が強くなる。

不思議な行動をする少女をしばらく見ていると、少女が視線を戻した。まだ何か考えているようだ。

「…シロ」

いったい何が言いたいのだろう。どう？、とでも言いたげな表情で少女はこちらを見ている。何をいえばいいのかわからずにいると、痺れを切らしたのか少女が言った。

「あなたの名前よ、シロ。いい名前でしょ？」

そう言って笑う。

とても衝撃的だった。それはもう、過去にこんなに驚いたことがあったかと考えたくなくなるくらい。名前が必要だとも思ったことがなかった。“自分”というものが個人として存在しているとすら思っていなかった。全体であり、ひとつである存在　それが“自分”だったはずなのに。

その名前を貰った瞬間、私は“私”を初めて認識した。

「シロ…」

貰ったばかりの私の名を呟くと、胸の奥のほう舞い上がるような気がした。人はこれを嬉しいと呼ぶのだろうか？

少女がなにかいいものを見つけたように、得意そうに笑う。

「初めて笑ったね」

そういわれて驚いた。笑ったこともなかったのだ。

本当におかしな少女だ。

私に何かを与える存在など、この世に何人いるだろう。

「それでは…貴方に、幸あらんことを」

今度は、その言葉に何を込めているのかわかる気がする。

少女は嬉しそうに言った。

「ありがとうございます、シロ。また会いましょう」

また、会えるかどうかはわからないのだけれど、このとき私はまた会えるだろうと予感していた。

はじまりのとき（後書き）

短っ！！

完璧なポリユーム不足です…あと表現力ねええ…

あ、ちなみにシロと名付けられるまで一人称を使わないようにして
みたんですけど…読みにくいですね…

犬みたいな名前だとか言っではいけません。

事情

丘の上に一人の少女が立っていた。

透き通るような青い空の下、だぼだぼのズボンとぶかぶかのシャツ、その上に年季もののマントを羽織っている。まるでどこかの田舎者のような服装だったが、その少女が着ると別物のように見える。風になびく漆黒の髪は腰に届くほど長く、肌は髪とは対照的な白さだ。服のせいか、体はやけに細く感じられる。触れたら壊れてしまいそうなほど繊細で美しく、まるで人形のようにだと商人たちは評していた。

「ヨミちゃん」

商人の見習いの男が少女　ヨミに呼びかける。

見習いの男とヨミの紫の瞳が合う。この瞳もヨミが人形のようにと言われる一因だった。

パッチリとした吊り眼で、長い睫毛の下にあるのは紫水晶の瞳。頬はほんのりと赤く、唇は艶やかな桃色だ。どこぞの貴族の令嬢だと言われたら信じられてしまうほど美しく、気品にあふれていた。よくよく見たら少女の手の皮が家事などのせいですっかり硬くなっていることも気づけただろう。

ヨミはにっこりと微笑んで呼びかけに答えた。

「はい、何ですか？」

それだけで見習いの男は赤くなる。

「や、その…そろそろ出発するから、戻ったほうがいって伝えるに…」

「え…もうそんな時間なんですか？気が付きませんでした。教えてくださいありがとうございます。」

「いやあ、お礼を言われるようなことじゃ…」

そこで男は言葉を切り、先に戻ってるね、といって去っていく。少女はその背中を見つめていた。

いったい誰が考えるだろうか、かわいらしい少女が胸の中で暴言を吐いているなんて。

男が去ってすぐにヨミは嫌そうな顔で溜息をついた。

少しにつこりしたただけであの反応だ。正直嫌になってくる。食事をしているときもチラチラと見てくる輩までいる。この隊商が野郎だけだった日には馬車ごとぶっ飛ばしていたかもしれない。そもそもなんであたしがこんな隊商と一緒に王都に行かなきゃならないのか。柔らかく微笑んだ狸ババアの顔が浮かんでくる。

ババアの名はユリア・シエス。蜘蛛の糸のように細い銀髪と絹のような肌。ダークブルーの瞳が子供のようにキラキラしていて、妖精のようだと言われている。エルフの血を継ぐため若々しく美しいが実年齢は100歳以上のおばさんだ。一応、あたしの育て親でもあるんだけど…。

ユリアが嫌な笑みを浮かべて話しかけてきたのはもう三日前のことだ。王都に届けてほしい物があると言われ、返事をする前にこの隊商に連れて行ってもらうから、となんて言ってきたのだ。もちろん断ろうとした。が、16歳になったばかりのヨミがユリアに口先で勝てるわけもなく、うまく丸め込まれてしまったのだ。

はぁー、とヨミは再び溜息をついた。

王都は嫌いだ。人が多い分、面倒事も多い。

ヨミは服についた草を取ると、隊商のテントがある方へ歩き出した。

天気は良く、隊商は調子よく進んで行ったので昼過ぎには王都に着いた。

「やっと、着いたぁ〜！」

周囲に目があり、自由に振舞えず窮屈だったから、開放されて気分がよかった。自由って素敵！

確かに旅慣れた隊商についていくのが一番賢いやり方だ。夜は明

かりがない　月や星というものが昔はあつたらしいが今はそんなものはない。その上魔物が活発になる。素人の一人旅だと夜に魔物に襲われてしまうのが落ちだろう。だから普通は夜旅に慣れた団体にひつついて行くのだ。だがあたしは素人ではない。はっきり言って一人できたほうが気楽だし早かったのだが、それだと怪しまれてしまうでしょう、と正論を言われてはどうしようもない。ああ、ユリアの笑顔が目には浮かぶ。目が笑っていない笑みが。

開放されてすっきりした気分ですれすれに「羅針盤」という店を探し裏道に入る。しつかり頭巾を下ろし、早足で歩く。そうしないと必ず嫌なことがやってくる。早足でも、やってくるが。

「よう、その嬢ちゃん、そんなに急いでどこ行くんだい？」

ああ、なんでこいつらはこうタイムング悪くやって来るのだろう。こつちはさっさと用事を済ませて帰りたいというのに。

下品な声。ひひひ、と気持ち悪い声が周囲から上がった。姿を現したのは五人。隠れてる奴はいない。たかが子供だとなめられているのだろうか。それとも、五人いるからって油断しきっているのか。だとしたら、阿呆だ。

「よかつたら、お兄さん達といい事しない？優しくしてあげるからよお」

それを聞いて他の奴が、笑い声を上げた。おい、こんなガキが趣味なのかよ、なんていつてる奴もいる。ちなみに16歳から大人だ。少々背が小さかったりしても、童顔でも、大人だ。よつて、あたしは大人だこの野郎。いけない、苛立ちが表に出てしまいそう。ただでさえ不機嫌なあたしの前に出てくるなんて本当に、阿呆だ。いつもなら半殺しにしてやるところだが、今日はそんな時間はない。あたしは休みたいのだ。こんな奴らに付き合つてやる義理なんてない。

あたしが黙っているとそのとてもお兄さんとは呼べないような老け顔な野郎が近づいてきてあたしの腕を掴もうとしてきた。嫌悪感で反射的に手を避けるように後ろに下がると何を勘違いしたのか、

こんなことを言った。

「おいおい、びびってんのかあ？かわいいなあ」
呆れてるんだよ、屑が。そんなこともわかんないのか。

そいつがさらに近づいてきたのを確認して、あたしは口角を上げた。この位置ならびつたりだ。あたしは頭巾が外れてしまわないように注意しながら大きく跳び上がり、そして

「なっ、なんふぎやあ」

さっき近づいてきた奴の頭をを踏み台にしてさらに跳躍、丈夫そうな看板を蹴り屋根まで上がる。さっきの野郎はどうやら私を目で追い上を向いたようで、頭ではなく顔面を踏んでしまった。涎が着いていたら嫌だし、後で靴を洗おう。

あたしは振り返ることなく、『羅針盤』を探すために走り去った。

事情（後書き）

変わらず短い…むっ

店主

「あら、久しぶりじゃないの！」

『羅針盤』に入った途端、巨乳の大女に抱きしめられた。ぎりぎりと締め付けられる。なんだこの馬鹿力。やばい、意識が遠のくっ！
「痛い、痛いっ、息できないっ！」

必死で脱出しようとしたが腕はびくともせず、あたしの抵抗は無駄な努力に終わる。開放してもらったのはあの世が見えかけたときだった。

「ごめんねえ、まさかまた会えるとは思ってなかったから」

しゃがんで肩で息しているあたしを見ながら大女は楽しそうにくすぐすと笑った。明るい笑い声がどんよりとした店に響く。とても場違いだ。

「アゼンダあ…相変わらず趣味が悪いのね…」

地獄から這い上がってくるような低い声で言っでやる。するとアゼンダはむっとした表情になった。

「アンって呼びなさいって言ったでしょう？それに趣味が悪いって何よ」

実際アゼンダの見た目は悪いものではなかった。むしろ美しいだろう。ちょっと色が派手な気もするが…流れるような髪はライトパールでポニーテール…いや、髪の量が異様に多くてとてもポニーテールには見えないがそこは置いておこう。陶磁器のような白い肌。艶かしい雰囲気もムンムン出していて、その上服装も体のラインがくっきりとわかる物を着ている。男なら思わず胸の谷間や白い足に目が行くことだろう。

店のインテリアもこざっぱりしていて、置いてある棚や机は流れるようなデザインで揃えられていた。

けれど、趣味が悪いのだ。だってアゼンダは…

「アンは女の名前じゃない」

そう、アゼンダは立派な男性だ。そして魔術師でもあった。『羅針盤』に来る客の9割はアゼンダが女だと思っている。なにせ変身術を使っていつも女になっているから。幻術ではなく、変身術。しかもかなりの使い手で魔力の痕跡もまったくくれば気づけるわけがない。

あたしが男だということを知ったのは全くの偶然だったが…まあその話は置いておこう。

「…それで、今回はどうしたの？」

『羅針盤』の店主であるアゼンダはかなりの変人だ。なにせ国家規模の犯罪者からお忍びのお偉いさん、さらには人外の者でもお代さえ払えるのなら泊めてくれるのだ。その上王都だけではなくほかの場所にも店があり…店の中は全て繋がっているときた。店を通り他の場所に出ることはアゼンダが許可すれば可能だ。もちろん、その分も支払わないといけないが。空間魔法を使っているようであったが、この魔法は持続できるような代物ではない筈だった。

「二日泊めてほしいの。食事はいらぬ。あと…前回の代」

この宿ならチンピラが殴りこんでくることも暗殺者や盗人が出ることもどっか兵士が調べに来ることもない。この宿においての法律はアゼンダが決めるから。アゼンダは客と友以外は店に入ることを絶対に許さなかった。

だから、あたしのような『か弱い乙女』も安心できる。それにアゼンダは情報通でもあった。儲け話の一つや二つ聞けるかもしれない…。

そんなことを考えながら、あたしは鞆から小さな木箱を取り出してアゼンダの大きな手に乗せる。アゼンダはすぐにそれを開けた。

中に入っていたのはミスリルでできた薔薇のブローチだ。魔力を帯びていて燃えるように淡く輝いていた。アゼンダは確かめるようにブローチを見た後言った。

「これならバッチリよ。おつりが出ちゃうくらい…二泊の分も含めたらちようどいいかしら」

「え、ほんとに？」

そのブローチはドワーフが作ったもので、高級品ではあるのだが…魔力を込めなければ普通の銀とかわらない。けれどこのサイズのミスリルでも満タンまで魔力を込めるにはありえないほど金がかかる。だから、自分でやってみただ。魔力の質は良いと言われているが、失敗しても損はない。

まさか前回の分に加えて、二泊分もいけるとは思っていなかった。アゼンダの宿は当たり前だが割高だ。

「ヨミの魔力は極上の質だもの。独り占めしなくなっちゃうくらいうっとりとした表情でアゼンダが微笑む。彼…いや、あえて彼女とっておく。彼女が箱のふたを閉じ、棚の奥にしまつのをあたしはただ見ていた。

…冗談だとしても気持ち悪くて鳥肌立ってしまうほどの破壊力。アゼンダ恐るべし。

「部屋は黒のクイーンよ」

「りょーかい」

どこからも無く現れた黒い鍵を投げ渡してきたので両手で受け取った。落としたら怒られる。つまりは、落としたことがあるのだが…軽くトラウマになっている。

カウンターの奥にあるドラゴンが描かれたタペストリーを捲り上げ、隠れていた廊下に入ると言われた部屋を探す。一番奥の部屋だった。あたしが窓のある部屋希望なことを覚えていたようだ。きちんと入り口で靴を脱いで、部屋に上がる。あたしが昔そういう習慣の土地で暮らしていたことを前に話したので、アゼンダがそういう部屋を用意してくれたのだらう。そういう細かい親切が嬉しい。

荷物をぽいっと放り投げて、あたしはまず風呂に向かう。個室に風呂…のではなく空間魔法で繋がっているのだ。大浴場に。この店の仕組みについて説明すると長くなるので省きます！なんでこんな非常識なことになってるのか考えてもキリがない。アゼンダは非常識の塊だ。

とにかく、砂埃を洗い流さないと寝転がることすらできない。布団があたりを呼んでいる。さっさと休みたい！

そんなことを思いながらあたりは無駄に広い風呂場に入っていた。

店主（後書き）

アゼンダは作者の好きなキャラです。

彼（彼女？）が主人公の話も書きたいくらい！

その前にこの話を進めなくてはなりませんね…；；

理想は週1で更新できるといいなあ…

王都一日目

次の朝、適当に朝食を済ませた後、面倒なことを先にやっておくと商店街で情報収集をしていた。

さすがに王都は人が多くてにぎやかで、活気があって…その分孤児や捨て子、スリなんかも多いが、商店街に来ると何だかわくわくしてしまう。

前来た時は夜だった。表通りに来る時間も無く、初めての王都を楽しむなんてとてもできることはなかった。だが今は時間がある。掘り出し物も多そうだ。せっかく来たのだから買い物をしよう。自分で稼いだお金なのだから、遠慮なく使える。

人ごみの中に飛び込み歩き回る。エルフやドワーフ、リザードマン等たくさんの種族が入り混じっている。ヨミが住んでいる町もなかなか大きい町だったが、さすがに王都にはかなわない。獣系の人とぶつかってしまったって、ちょっと怖かった。でも毛並みがふさふさしてて気持ちよかったりもした。

愛用の頭巾付きマントを羽織ったまま、美味しそうな香りのする屋台に近寄る。

油ののった肉が、串焼きにされていた。値段も　そこそこ。これは買うだろう。

「一本ください！」

小銭を渡すと屋台のおばちゃんは嬉しそうに笑った。くしゃりとしわの寄る笑顔。はいよ、と差し出されたそれを受け取ってすぐにかじりつく。

熱かった。焼き立てだったようだ。はふはふしながらも、噛むと肉汁とソースの香りが口の中で広がった。

美味しくて、あつという間に平らげると、もう一本食べたくなってきた。すると、目の前に串焼きが差し出されて、驚いて顔を上げるとおばちゃんが

「あんなに美味しそうに食べてくれると、嬉しくなっちゃうわ。もう一本おまけしてあげる」
そう言つてウインクした。

「ありはとぶっ！」

貰つた串焼きを早速かじりついて喋つたので発音がおかしくなつてしまった。

その後しばらくは屋台のおばちゃんと会話が弾んだ。荷物の届け先の事もさりげなく聞いた。

本当なら普通に聞けばいいことなのだが、つい癖で、できるだけ自分の目的を直接知られないようにしてしまう。さらに他の情報も集めてしまう。王族の噂から庶民の噂まで。噂というものは馬鹿にできない。たとえ半分以上が出任せでも残りは真実なのだ。思わぬところで役に立つ。

その後も商店街を人の波に流されるように探検してみたのだが魅力的なものがあつても眺めるだけでやめてしまい結局、串焼き以外にも買わなかつた。串焼きでかなり満足してしまつたのもある。

ちなみに目的の場所はおばちゃんの言つた所であつているようだった。又ワシャータ老：別名「帽子の人」。西門の近くに住んでいるらしい。特徴的な家だからすぐにわかるとのおばちゃんと言つていた。

昼頃に訪ねてみたのだが：言われたとおり、すぐにわかつた。円錐型の、赤いレンガでできた建造物がドドンと建つていて、その小屋根だと思われるところに子供達が登つて遊んでいる。

完璧に子供の遊び場だった。

啞然としながらも入り口と思われるところまで行く。すると太い紐か一本垂れていて、先っぽにある木の板に『呼び鈴 二回引く』と書いてあつたのでその通りにすると建物の中からガラゴワン、と鈴というより鐘に近い音がした。

するとがちゃんつと鍵を開ける音がして、扉が開く。その間から顔を出したのは背の低い、顔が敵ついのになんとなく整っている男

性。そして…頭にはラフラフ鳥のオレンジと黄緑の縞々尾羽をふんだんに使用した三角帽子。なんていうか…残念な方？

彼はこちらを見ると、不思議そうな顔をした。

「どなたかの？」

そんなに老けているようには見えないのだが、口調は老人そのものだ。彼が動くとき帽子の羽がひらひら揺れる。

ドワーフ…にしては何処かおかしい。肌がすすべすべなのだ。エルフのように。とんでもなく違和感を感じる。

「あたしはヨミといいます。ユリア…ユリア・ツェスから届け物を頼まれたのですが…ヘルグムさん、ですよね？」

ユリアの名前を聞いた途端、彼はこっちが驚くぐらい、驚いた。十センチぐらい飛び上ったんじゃないか今。

「確かにワシはヘルグム・ヌワシャータじゃが…ユリアから届け物じゃと？」

心底驚いている模様。本当に、なにをしたのさユリア。

あえてツツコまず、あたしはその届け物を取り出すと、手渡した。ヘルグムさんはまじまじとそれを見、その場で開け始める。…実に雑なあけ方だ…。包み紙をびりびりにしている。紙ふぶきができそう。

中から箱と、手紙が出てきて、ヘルグムさんは手紙を食いつくように読んだ。顔近すぎないか？あ、顔を上げた。

「確かにユリアからのようじゃの。あやつもこんな若い女子を使いに…相変わらず酷い奴のようじゃ」

大分落ち着いたようですねヘルグムさん。でもあたしは大人には見えなかったのね…くっそ、両親は背、低くなかったはずなのに軽く笑って流す。うっ…。

「ヨミさんはあと何日ぐらい王都におるんじゃない？」

「え？明日には帰るつもりです」

するとヘルグムさんはふむ、となにやら考え込む。どうしたんだろっ？

不思議に思いながらもとりあえず待つ。

「…もし、また王都に来ることがあったら、ここに寄って行ってほしいんじゃない」

本当に何がしたいんだろう？いや、別にいいんだけどさ。

「わかりました」

につこりと笑って、そう答えておいた。

それに対して満足そうに頷いたヘルグムさんの顔は、どことなく見覚えのある顔だった。あんな特徴的な人は一度あつたら忘れられないと思うんだけどなあ…。

王都一日目（後書き）

なーんかまとまりが悪い気がします。

ヘルグムさんの名前はその場で決めてたり（笑

エルフ兄妹

「はあゝあ…」

無事ユリアの届け物を届け終わった次の日、アゼンダに別れを告げたあたしは帰りの馬車を探してうろろろしていた。定期便の馬車は遅いくせに値段が高すぎる。

前にもいったかも知れないが、一人で帰ったほうが断然早いし、足手まといがない分安全だ。

けど怪しすぎた。普通の女の子は昼間に出てくるよわっちい魔物でさえ倒せないだろうから。夜は魔物がよく活動する時間帯だ。普通、馬車を使って王都からテルダクに行くと三日かかる。徒歩だと自殺行為だと言われる。ちなみにあたしでも二日はかかる。

とにかく、あたしは一人で帰るわけにも行かず、来た時と同じように隊商の馬車に乗せてもらおうと思ったのだ。

ただ、あんまりよろしくない…夜に襲い掛かってきそうな輩がいるところを避けていると、なかなか乗せてくれるところが見つからない。くそー、女だからってなめてるのか。最低限の自衛もできない、世話のかかる子供だと思っっているのか。

内心いらいらしながらふと顔を上げると、人ごみの中で目に留まった人物がいた。

垂れ目で、瞳はサファイアブルー。淡い金色の睫毛が装飾のように見える。髪は肩につかない程度に短く、緩やかに波打っている。耳は尖がっていて、エルフであることを教えてくれた。服装が滑らかで薄そうなの、実用的とは思えない生地できているのも人外じみた雰囲気をもし出していた。

あたしより、背が低い。

その少女はきよるきよると辺りを見渡しながら、ふらふらと何処かに行こうとする。…絶対に、危ない。幼いエルフなんていうのは

狙われやすい。それに、どう見ても迷子にしか見えない。

あたしは慌ててその子を追いかける。ちっちゃいからあつという間に人ごみの中に入って見えなくなってしまうそう。くそう、みんなでか過ぎるんだよ！

やっと追いついて、あたしはその子の手を掴む。すると驚いて…
るようには見えない表情で少女が振り向いた。そのままじいーつとあたしのほうを見てくる。瞬きの回数少ない…。あれだ。猫と目が合ったみたいなき感じ。

「ひとりで歩くと危ないよ」

そういつとこくと少女が頷く。無口な女の子だなあと思いながらも質問を続けた。

「連れはいるの？」

少女が頷く。

「待ち合わせとかは？」

少女が横に首を振る。これは困った。

「探すの手伝うよ」

そう言うと、少女は少しでも表情を変化させた。瞼が0・1ミリくらい。…本当に表情動かさない子だなあ。

躊躇うように視線をそらしたかと思うと、すぐに戻して頷いた。あたしはそれににこりと笑う。

「じゃあ探そうか。家族？お兄さんとか？」

少女は二回続けて頷いた。おお、どんぴしゃ。お兄ちゃんっつって感じがするんだよね。

「どこら辺ではくれたの？」

「…一番近くの門の前」

「そっ…か…!？」

喋った！やはりエルフだから、鈴のように綺麗な声。声を聞いたことをちよつと嬉しく思いながら、門の前に向かう。…少し前にあたしが歩き回っていたところだ。

エルフ兄…まあ成人はしてはいはずだ。身体的特徴は女の子と似て

いると思つて良いだろう。きよるきよるとそれらしき人物がいなか探しながらも女の子と手をしっかりと握っておく。

2、3回人間違いしながらも何とか見つけることができた。通りにいる人の半分がエルフやドワーフ等といった種族だから大変だった。最初に発見したのは女の子だった。

エルフ兄はやはり妹にそっくりの美形だった。

すらりとしていて、背が高いその男性は長い髪を後ろで三つ編みのようにしている。布を編みこみでもしたのか、まとわりつくように鮮やかな蒼の布があった。その蒼は金髪によく合っていて、金髪の合間から覗いた尖がり耳にも同じ蒼のピアスがついていた。妹と違い口元には笑みを浮かべている。パツと見たらなんて爽やかそうな人だ、と思うかもしれない。

でもあたしはその笑みの中に腹黒さがあるように見えた。…きつとユリアの笑みを毎日のように見ていたせいだろう。

エルフ兄は妹に気づき、こちらに近づいてくる。背、高いな。エルフつてこんなに高いものだったけ？

「パール！」

声質はさすがに妹とは違った。優しく響く声。エルフつてみんな素敵でいいなあ。

妹：パールちゃん？がエルフ兄のほうに向かっていき、後ろに引く付くとあたしのほうを指差した。

「妹を見つけて下さりありがとうございます。お礼がしたいのですが…」

お礼？…何ができるかな、このエルフ兄妹。

遠慮なんて言葉はあたしの頭にはないらしく、すぐさま何をしてももらえるか考える。

なんか大きな荷物持つてる。旅でもしてるのかな？兄のほうは弓も持つてるなあ…魔法も一通り使えなきゃエルフの里から出れないだろうし…

「王都に住んでるんですか？」

そう聞くとエルフ兄はいえ、と答えた。

「情報都市テルダクに向かう途中です」

来たよ！目的地一緒！ならば…

「あたしもそこに行くところなんですけど…乗せてくれる隊商がなかなか見つからなかったんです。そこでなんですけど…連れとして隊商と一緒に乗せてくれませんか？魔術師不足の隊商があつたので」

兄が妹にチラツと視線を送つたのをあたしは見た。妹のほうは相変わらず無表情だったが、かまわずこちらを向いた。その顔は先ほどとは違い、腹黒度が減っていた。さっきの視線で何を確かめられたのか…。

「わかりました。遅くなりましたが、私はセト・ヴァティーといいます。こっちは妹のパール」

妹ちゃんがぺこりと頭を下がる。

あたしはニヤリと…じゃなくて、にこりと笑って言った。

「あたしはヨミです。それじゃあ、よろしく願います」

もしかしたら、目は笑ってなかったかもしれない。

セト・ヴァティーとパール・ヴァティー。ずっと前に聞いた事のある名前。

あたしが忘れてはならない名前のうちの二つが、それらだった。

エルフ兄妹（後書き）

なんかだんだんヨミの口調が雑になってきている気がする…

まあそれは置いといて、ヴァティー兄妹出ましたよ！

パールは妖精ってイメージで、セトは森の番人って言うか、レンジ
ヤーって言うか…そんなイメージです！

魔物の予感

がたがたと馬車が揺られながらの帰路は順調だった。けれど馬車に乗ったことは余りないから、その揺れは気持ち悪い。

気分も影響しているかもしれない。

王都に行き、帰る間はずっと平凡な少女のヨミとして行動している。だから魔物と戦うなんてもつてのほか。魔物を殺すのが趣味というわけではないが、歩いたり物を運んだりする程度の運動では物足りないのだ。自分で目立ちたくないからと、決めたことなのだがそれでもやはり苛苛する。さらに付け加えるとすれば…この隊商、ほとんどいないのだ。商人の人も雇われた護衛の人もみんな男。女はあたしとパールと魔術師のねーちゃんだけ。パールは魔法使いとして乗せてもらっているけれど、あたしは役立たずの女の子、という事になっているから視線が痛い。

それもあと一日の我慢だ。あと一日で情報都市テルダクに着く。休憩地で地べたに座っていたヨミは何度目かわからない溜息をついた。

すると、パールがそれを見ていたようでじいっとこちらを見ながら微かに首を傾げる。…5°くらい？

まだ知り合ってから少ししか経ってないのにその動作を見て何を言いたいのかわかっちゃああたしが凄いわ…。どうしたの？と心配してくれているのだろう。

「ちょっと、疲れたのかな？あんまり旅慣れてないから」

あたしがそう言っていると、パールは少し考えるように視線を下げる。

これも少し変わった癖だろう。彼女は考え込むときは大体視線を下げるのだ。数秒してパツと顔を上げた彼女はいきなり両手であたしの頬つぺたを挟み込む。何がしたいんだろう？

怪訝な顔をしているあたしのことなんて気にもせず、ムニムニと数秒して、手を離れた。どことなく満足げに見える。

理解に苦しんでいると背後から笑い声がした。聞き覚えのある声。「それはパールの“手当て”ですよ」

振り向くとそこにはセトと傭兵の…名前なんだっけ？がこちらに歩いてきていた。彼はそのままパールとヨミの傍まで来ると腰を下ろす。傭兵Aは近くで突っ立っている。座ればいいのに。

そうは思っても声をかけてやるつもりはないんだけどさ。「手当て、ですか？」

傭兵Aのことはスル して、訊く。

「はい、手当てです。魔法なんかよりもずっといい治療法でしょう？パールが知り合って二日の人にそれをする事なんて滅多にないんですけど…ヨミさんはいいい人なんでしょうね」

疲れているときに妹、弟達とじゃれ合つと癒されるのと同じ類かもしれない。“手当て”をしてもらって、確かに苛々や疲れが和らいだ。ただ、後半部分の意味が分からない。

するとセトが楽しげに笑う。…もしかして顔に出た？

「パールは人の本質を見抜くのがうまいんですよ。私は苦手なのでいつも妹に頼りっぱなしです」

パールがこれまで見たことないくらい大きく頷いた。いやいやいや、そこで頷く？

「そこで頷くんかい」

…ちなみにこれはあたしではないよ。忘れられてた傭兵A。ツッコミありがとう。

あたしは傭兵Aをさすがにこれ以上スル するのは不自然だろうと、声をかけるために口を開いたが思わず閉じてしまった。

どうやら、気がついたのはあたしだけではないようで、セトはふつ、と一瞬だけ笑みを消し、パールは顔を強張らせる。…パールのは、よくよく見ていないとわからない変化だったけど。

ちなみに傭兵さんは不思議そうにきよるきよるしているだけだ。

「魔、物…？」

非戦闘員、ということになっているあたしは呟いた。敏感な種族なら気付けるから、別に不自然なことではないだろう。あたしは紫の瞳をしているから 人族に紫の瞳はいない いろいろ混じってるだろうことは気づくだろうし。傭兵さんはきつと人族だろうな！。

あたしの呟きに答えたのはセト。

「ブラックウルフですね。それもかなりの数です。足が速いので逃げるのは無理でしょう。迎え撃つことになるかと。…十分対処できる数なので大丈夫ですよ。ね、ガイズさん」

ガイズさん誰だ…と思っていたら、傭兵さんがおう、と返事をしました。そういえばそういう名前だった気がする。伊達に傭兵やってないようで、状況把握したばかりだって言うのに落ち着いてる。まあ、あたりまえか。

きつと、セトはあたしを安心させようとしてくれているのだろう。けれどあたしは微塵も恐怖を感じていない上に、別のことを気にしていた。この距離で何で魔物の種類までわかるの？移動速度早くて群れる魔物なんてたくさんいるのに。もしかしたらセトは精霊の愛し子なのかもしれない。それなら精霊から詳しい情報を聞くことができるだろう。

これはただの予想だけど、もし精霊の愛し子だとしたら本人は気が付いていないことになる。愛し子は狙われやすいのだ。研究対象であり、兵器であり、神聖視されるものでもある。全てしようもないものだけれど、馬鹿に出来ないほど危険だ。精霊の愛し子だとわかっていたら、エルフの里から出してもらえないはずがない。

ただの感違いかもしれないけれど、本当だったら嫌だなあ。この後に戦闘があるだろうから、その時に確かめてみよう。

そんなことを考えながらも、セトには困ったような表情で笑って見せた。

魔物の予感（後書き）

ガイズさん、書きながら創られました！設定ない！
ただ、貧乏くじな人、という印象を持って書きました…。
自分で書いておきながらなんです、かわいそう。
ちなみに魔術師と魔法使いに違いは在りません。

最後の最後で

黒い氾濫。

あたしはその景色を見て、ふとそう思った。

見渡せば、馬車の周りはすべてその黒で埋め尽くされている。あたりは暗くなってきたのでその黒がどこまであるのかも満足に見ることができなかった。見れなくて特に問題はないけれど。

ブラックウルフ。セトの言った通りだった。

体長は約一メートル、濁った黒の剛毛と、黄色に光る眼が特徴。

10〜100匹の群れで行動する。何の前触れもなく周辺の群れ同士で集まり、大移動を行うことがある。原因は不明。大移動中は狩りよりも移動を優先する。確かこんな感じで昔、説明された。

黒く蠢く大地の中には点々と黄色い光が見えた。これはブラックウルフで間違いないだろう。同じような種でポイズンウルフなんていうのがいるのだが、ポイズンウルフの眼は赤色だ。

今回は大移動のようで、通り過ぎるまで耐えきれればいいのだが、さすがに、目の前に獲物があるとなると襲い掛かってくる。さらに、通り終えるのがいつになるのかわからない。ヨミの予想では早くても一時間はかかる。

話し合いの結果、馬車の周りを前衛の方々に囲み、馬車付近の奴だけを蹴散らす方向で決まった。場所は見渡しの良い平原だ。

商人は不安：いやそれどころではない様子で鼻を鳴らす馬をなだめている。馬達は落ちつかない様子だが、それでも暴れるようなこととはなかった。このような状況であそこまで落ち着かせることができるなんて馬の扱いが相当うまいようだ。

残りのメンバー：後方支援のセト、パール、魔術師のねーちゃん、戦力外のあたしは馬車の上だ。ちなみにあたしが馬車の上にいるのは、戦況が見れないのは嫌だし、なによりセトとパールの能力が気

になつたからだ。

ブラックウルフの足音が地鳴りのように轟いている。その中に金属音が混じって聞こえた。

馬車の下で戦っている方々は置いといて、あたしはさっそく二人のチェックに取り掛かる。がん見してるだけだけど。少々拳動不審でも問題ないだろう。おかしな女の子だな、で済むはずだ。

セトは矢の数が限られているからか、一矢一矢丁寧に射っていた。エルフなので細い割りに筋力はあるのだろう。ロングボウを苦もななく引き、正確に射る。目がいいのもエルフの特徴のひとつだ。

軽い音を立てて飛んでいったそれらのほとんどは眼や、開かれた口の奥に弾かれず、一撃で仕留められる部位に当たり、その他のものは前衛の人を助けるようなタイミングで放たれていた。

弓なんかやったことがないが、セトのやっていることがすごいことだというのはわかる。まさに百発百中だった。ただ、ロングボウは狭い場所では不自由だろう。なにせ1〜2mもの長さがあるのだ。距離も威力も普通のものより長く、強いだろうが接近されたときにセトは対処できるのだろうか？

パールはというと、やっていることはセトとほとんど一緒だ。範囲の狭い魔法で、倒したり、助けたり。ただ、回復魔法と支援魔法も使っているようだった。

支援魔法は基本的にもともとある能力を魔法で強化するものごとを言う。属性によって効果もさまざまで、他人にかけるためには他人に魔力をなじませれないといけならしい。あたしは使えないのでさっぱりだが。

さて、ここで気になることがひとつ。

パール、魔法使い過ぎじゃない？

10人近くいる前衛全員に対して支援魔法、怪我をしたら治癒、攻撃魔法をセトの弓と同じ頻度で使用。一般的な魔術師なら二十分もしたら魔力切れで昏倒してしまうところだ。

ほら、隣の魔術師のねーちゃんが驚いてるよ。

内心そう思いながらもパールの横顔を見てみたのだが…あるのは戦いの緊張感だけで、疲れた様子もなく黙々と魔法を使い続ける。もしかしてパールって魔力量が凄い？

辺りがすっかり暗くなり、馬車の周りがブラックウルフの死体でいっぱいになった頃にやっと大移動している群れの終わりが、戦いの終わりが来た。

咽るような血の臭いと、むわっとする汗の臭いが混じって少し気持ち悪い。

前衛の方々はさすがに疲れた様子だったのだが血の臭いに引き寄せられて魔物が来るかもしれないので休むまもなく馬車が動かせるように周りの死体をのけ始めた。セトも手伝っている。

もちろんあたしとパールはしない。

魔術師のねーちゃんは疲れて一足先に休んでいた。魔力は使いすぎると頭が痛くなったりするらしい。

長い時間、たくさん魔法を使い続けていたパールとはいえ平然としている。あれだけ使っても軽い頭痛の様子すらないのだから魔力量がとんでもなく高いのだろう。エルフは魔力が基本的に高い種族ではあるが、それでもパールのようなことはできやしない。

馬車の外は風が吹いていて、臭いを吹き飛ばしてくれる。…まあ、魔物に気付かれやすいつて事だけでも、やはり綺麗な空気が吸いたい。

あたしはパールと一緒に死体をのけ終わるのを待っていた。もう馬車のほうは準備ができていて、やることもない。

だから、暇だった。時間を潰そうとパールに話しかけようとしたその時。戦いも終わりすっかり気が緩んでいたのだ。

一瞬だった。

死体の山から突然飛び出したそれはまっすぐにパールのほうに向

かっついていて。

膨れ上がった殺気に、パールが硬直したのを見たあたしは、咄嗟にかばうように動いた。

後で思えば蹴り飛ばすなり何なりすれば良かったものを、あたしは思わず刃を出してそれを切り捨ててしまっていた。音もなく切り裂かれたそれ　ブラックウルフ　はパツと赤い血を散らして真っ二つになる。

おそらくしとめ損ねた奴が、他の死体に埋もれていたのだろう。

あたしはそれが地面に落ちた音を聞いてはつとし、慌てて振り返る。パールは、硬直したそのまんまの姿勢で目を見開きあたしを見つめていた。

よかった、かすり傷ひとつない　　ってそうじゃなくて、いや怪我はないのはいいいことだけど！

「…できれば、秘密にしといて欲しいな」
苦し紛れに言ってみる。あああああ、あたしの馬鹿ああああ。きつとあたしは笑ってるんだろな、きつと頬は引きつっているんだろ
うな！

パールはしばらく固まっていたが、やがてこっくりと頷いた。怪しすぎるよな、あたし。でもパールのことだから言いふらすようなまねはしないでらう。たぶん。

ここにいたのがパールでよかった。セトに見られたりしたら、もつと気まずいことになっていた気がする。

「ありがとう」

あたしは少し不安に思いながらも、パールにお礼を言った。

するとパールはまだ少し混乱しているようだけれど、ゆるゆると首を横に振ってから、言った。

「ヨミは言わなくていい」

…主語がアリマセン…。なにを、ですか？

パールは気にせず続けた。

「お礼。…助けてくれてありがとう」

そういつて少し笑ったパールを見て、あたしは少しほっとした。
本当に、パールに怪我なくてよかった。

最後の最後で（後書き）

前衛方に哀れみを覚える今日この頃。名前すら出してあげなくてごめんなさい。

さっさとヨミを暴れさせたい……。戦闘描写はやったことないものでどうなるかはわかりませんが、ヨミの戦闘シーン書いてみたいです！。

帰郷と上京（前書き）

7 / 22 変更。

帰郷と上京

広い平原を抜けて、見えてきたのは大きな二つの山に挟まれるように佇む大きな壁。円形を描いているであろうそれは王都のものよりも地味で、王都よりも堅牢に見える。その上に被さるように淡い桃色の魔法障壁があり、ゆるやかに魔力を放っていた。

情報都市テルダク。人間が作った都市の中で二番目に大きな都市だ。

希少な動植物や魔物が近くの森や山から取れるので、様々な研究者が集まり、魔物討伐支援ギルドを始めとするギルドもたくさんあり、冒険者や商人も集まる。人が集まれば情報も集まる。テルダクが情報都市と言われる所以は文字通り情報が集まるからである。大きな学園や王都よりも大きな図書館がある。あとは：変人が多いくらいだろうか、この都市の特徴は。

なぜ王都にはない魔法障壁が張られているか、あたしも昔は不思議に思っていた。大昔の魔法研究者かなんかが実験のつもりで魔法を使ったところ、偶然強力な結界になった、とかいうあほらしい理由だと知って泣きなくなっただけ。外壁がやけに立派なのもおなじような理由だった。王都をこちらにしようかなんて話が何度か持ち上がったことがあったが、研究者＋ が一致団結して王都の貴族達と“話し合い”をし、止めてもらったらしい。“話し合い”の内容は知らない。知りたいとも思わない。

あたしたちがテルダクに着いた頃には昼になっていた。

これまた、王都よりも数倍大きな門を何の問題もなく：いや、血生臭いせいでちょっと避けられたけど：それ以外は問題なく、通り過ぎて町に入って、商人ギルドの一角で馬車が止まった途端に

「ぶあああああああ やつとついたあ！」

魔術師のねーちゃん：リアリエさんが物凄い声を上げながら馬車の

外に飛び出した。まあ、気持ちはわからなくはないんだけど。

一応洗ったとはいえ、染み付いた血の臭いが簡単に取れるはずもなく、馬車の中は嫌な臭いで充満していた。あたしもねーちゃんほどではないが急いで馬車の外に出て深呼吸したくらいだ。

雇われた人たちはこの後報酬を貰って解散するのだろう。あたしは雇われたわけではないけれど、セトが報酬を受け取り出てくるのをパールと一緒に待っていた。あたしが考え事してたせいか、一言も話さず突っ立っているなんてことになっていたけれど。そのことに気が付いたのはセトが出てきてからだった。

「すみません。待たせてしまつて」

申し訳なさそうにセトが言う。パールが力強く頷くが、あたしは首を横に振った。実際そんなに待った気はしていない。

「二人はこれからどうするんですか？」

ふと気になつてそう訊く。二人はハンター（魔物討伐支援ギルドに登録している者）なのではないかと思っただけだ……。

「魔物討伐支援ギルドで試験を受けるつもりです」

………へ？

あたしが固まっていると、不思議そうにしながらもセトがもう一度言った。

「ハンターになり来たんです」

ちよつと待てる、あんなに自然に、傭兵…ハンターかもしれないけど、そんな奴らの中で凄いいい働きしてたのにまだハンター登録すらしていない？普通にBランク（ハンターランクはF〜SSS）でいけるぐらいなの…？ていうか王都でも登録できたはずだよ？何でわざわざテルダクまで？ああ、もしかしてテルダクに知り合いがいるとか？

そんなこんな考え込んでいるとパールが口を開いた。

「…ヨミはどうするの？」

「弟や妹が待つてるだろうから…家に帰るつもり」

二人がどうしてテルダクまで来たのかは気になるけれど、気にし

ないでおこう。ギルドには余り近づきたくない。

…パールがじいつとこつちを見ていてくれど気にしない、気にしない。ちよつと不満そうな顔になってるけど気にしない気にしない！

「そうですか…」

なんでセトまで残念そうな顔してるのさ？

「あんまり遅くなると家族が心配しそうですし、そろそろ帰らなきゃいけません」

おつかい行かせたのもその家族だけだな。

内心でユリアの微笑みを思い出しながら、付け加える。

「じゃあ、ヨミさん。お勧めの宿とかありますか？」

お勧めの宿？

あたしはセトの顔を見た後、パールに視線を移した。

あの実力で、ハンター試験を受けて、普通に活動するとする。今回の馬車のメンバーにもハンターはいるだろうからきつと噂になるだろう。凄腕の弓使いと魔術師。しかもエルフで美形。引き込まない手はない。柄の悪い奴らも来るだろう。信頼できる宿がいい。長くいるかもしれないことも考える。あんまり高いのは良くないだろうか。

「マジックショップ『啄木鳥』の裏にある『雨漏り亭』か、鍛冶屋『蜻蛉』の二階にある隠し宿『蒼穹』が値段もお手ごろでおかみさんもいい人です」

もちろん一番安心できるのはアゼンダの『羅針盤』だけど、値段が高い。それに、テルダクのどこにあるのか知らなかった。たぶん都市には全部あるのだろうけど、王都にある入り口しか知らない。

「ありがとうございます」

そう言っただけで笑ったセトの顔は、見たことのある種類の笑顔だった。ユリアほどではないけれど…腹黒さがうかがえる笑顔。…気のせいだと思いたい。

「じゃあ、もう行きますね。また、会いましょう」

頭を下げてから、早足で歩き出した。また会おうというのには特

に深い意味はなく、口癖のようなものだったのだけれど、まさかあんな風に再開することになるとは思ってもいなかった。

エルフ兄弟と別れてから、あたしは寄り道することなく家に向かった。

歩きなれた道は特に大きな変化もなく、小さな花が咲いていた。中央部やギルド街、商店街とは違って活気のない道。かといって裏道でもない。あえて言えば、居住区か。背の低い木造の家々が並んでいる。

その中でも大きな一軒。古くて、でも広い家。家の前にある走り回れるほどの庭では、様々な年齢の子供が遊んでいる。来ている服はみんなぼろぼろで、体も脂肪というものが一切着いてないような細さだけれど、表情は明るい。

帰ってきた。

そんな思いを感じながらなんとなく門の前で突っ立って家を眺めていると、庭で遊んでいた子供のうちの一人があたしに気が付き、ばあ、と笑顔になるとこちらに向かってきた。

「ヨミ姉ちゃん！」

もうすぐ九歳になるへプタだ。赤茶の髪と、女の子のように細い体。病弱なせいで一ヶ月に一回は熱を出してしまう。

走ってくる姿はふらふらしていて、あたしの目の前でふらりと倒れそうになる。慌てて受け止めると、へプタはあたしの顔を見てにこっと笑った。

「おかえり！」

見れば、他の子たちもへプタに遅れまいとこちらに押しかけてきている。その満面の笑みにあたしも笑顔で答えた。

「ただいま！」

帰郷と上京（後書き）

盛り上がるシーンはいくらでも妄想が膨らむんですけど…それ以外は曖昧で。心情もうまく表せてないし、表現力不足ですね。すんませんー。

ちなみにへプタは適当に書きながら考えてたけれど、なんか好きです。別に出す予定もなかったキャラなんですけどねー

夜のギルドにて

魔物討伐支援ギルドは2000年以上前から続く由緒あるギルドである。創設者は時空魔法の使い手であったとされていて、ギルドの本部には2000年前の部屋が当時のまま存在しているなどという逸話がある。どこまで本当かはわからないが、創設者は当時の人が思いつくはずのないことをやってのけたことだけは確かだ。ギルドの決まりも2000年前からほとんど変えられていないらしい。

試験を行い、合格すれば“アリウスの水晶”に登録され、“アリウスの水晶”からハンターの証明書であるギルドカードが生み出されるのでそれを受け取ったらハンターとなる。ギルドカードには名前、年齢、種族、生年月日、連絡先、加入日、最終更新日、クラス、(魔力量、属性)ランク、ランク別クエストクリア数、勲章、称号が記載されている。

クラスとは戦いのスタイルのことだ。剣士・重剣士・双剣士・侍・空手家・弓使い・ガンナー・盗賊・忍者・道具使い・魔道士・ヒーラー・精霊使い・召喚士・幻術師・神官・魔獣使い・学者：等。ちなみに侍と忍者があるのは東の国出身者から不満の声が上がったからだ。

魔力量とはその名の通り、魔法を使うための力の量である。魔力量は一般平均が10、一般魔導師が250、エルフ平均が500、王都ぶつ飛ばすレベルが1000、ドラゴン平均が5500。ちなみに時間魔法は100,000,000(一億)ぐらい一気に消費する。

属性については火、地、水、風、光、闇が一般的で稀に時空属性や変化属性などの例外が存在する。種族によっても差はあるが属性は一人3つが普通で、その中でも得意不得意が偏っている。火、地、風属性を使えたとしても、全て上手に使えるわけではないのだ。

ランクは、ギルドの掲示板に張り出されている依頼 クエスト

をこなし、ポイントを貯めていくと上がる。F、E、D、B、C、A、S、SS、SSSという風に。F、場合によってはD、Bランクからスタート。Sまでなら努力でたどり着けるといわれているが、SSに上がるところで命を落したり、挫折するものが多い。

無意識のうちに吐いた溜息の音が、周りが静かなせいでやけに大きく聞こえてはつとした。

広い空間の中にぼんやりと灯る明かりに照らされて見える磨かれた石の床の上にアンティークで揃えられた椅子や机が寂しそうに佇んでいる。昼間の活気はどこにも見られない。

夜は闇の時間。光に属する者はたとえ町の中でも夜に歩いたりはしない。それは少々風変わりな人が多いテルダクでも同じだった。夜に魔物やその類が出るのが多いことは知っているが、正直迷信としか思えないこともある。昼なら闇に属する洞窟の中の魔物と闘えても、夜は闇の時間だから簡単な依頼でもやりたくない、というのはとてもおかしなことのように思える。

魔物討伐支援ギルド、テルダク支部の夜の受付担当セレン・アルスは夜を恐れない変わった人間だ、とハンター達の間では噂になっていることを、セレンは知っていた。おまけに美人だ、といわれているのは知らなかったが。

彼女からしてみれば、ほんの少し魔物が強くなり、視界が悪くなるだけなのに夜の依頼を避けるのはあほらしく、初心者でもない熟練のハンターのほとんどがそうするで、あほらしさを通り過ぎて呆れていた。

そのおかげで夜の依頼は溜まる一方。正直受付にしている意味もない気がしてくる。

ま、ここはかなり良いほうなんだろうな。

テルダクには人が集まる。でも糞みたいな貴族は少ない。個性的だけど糞ではないハンターがたくさんいるから、夜の依頼受けられるハンターも他の都市よりは多い。それでも退屈なことに変わり

ないが。

カウンターに突っ伏して、暇だなくなんて考えていると、唐突にとん、と軽い音がした。

びっくりして上半身を慌てて起こし音のしたほうを見る。受付がだらけていては様にならない。

「…あ」

無意識のうちに声を漏らしてしまった。

そこにいたのは“夜の少年”だった。夜の依頼しか受けない16歳という若さなのにSランクである少年。

眼から上と耳、うなじまで見えなくなるへんてこな形の帽子と黒狼の皮のジャケット、大きい白いズボンの裾は黒いブーツに入れられて腰には少年には長すぎる刀が一振りとめられている。ハンターとしてもこんな格好をしているものは他にいないだろう。

帽子の下から出ている髪は艶やかな黒。もし彼が長髪だったら見事だろうな、と何度思ったか。鋭さを感じさせる相貌は赤と紫のオッドアイ。肌はセレンが嫉妬したくなるくらい白く滑らかだ。ここまで来ると女といっても通用するように思えてくる。けれど、少年は下手な男よりよっぽど男らしいとセレンは思う。

「ソラ…」

名前を呼ぶと彼は口の端を吊り上げて笑う。

「よう、セレン。一週間ぶりか？」

「そのくらいかしら？」

カウンターの前まで歩いてきたソラを見ながらセレンは微笑み返した。毎日来ていたソラが用事でこれなかった間、酷いときは一人も来ないなんていう、夜の受付係の存在意義を疑いたくなるようなことが何回もあった。退屈でたまらなかった。

「依頼が溜まりに溜まってるのよ」

それを聞くとソラはククツと笑う。

「じゃあ、さくつと解消しようか」

まとめておいた依頼の紙をソラに見やすいように並べる。普通な

ら掲示板に貼ってあるものから選んでくるのだけれど、夜に来るのはソラくらいなので、急ぎのもので難易度の高い依頼をまとめてあるのだ。

その中からソラは当たり前のように三つ依頼を選んだ。その依頼を見てセレンは思わず笑みを浮かべた。

相変わらず、無茶苦茶な依頼の受け方をする。

ブラックウルフの群れ討伐。テルダクの東部に現れる群れを殲滅せよ。天満草の球根20採取。傷のない状態で、今日中に。ブラックウルフの銀毛三本採取。全体が銀色であるものを求む。

ブラックウルフの群れは数が多い。ソロで行くのは…いないとは言わないが、大体パーティを組んで行くものだ。天満草は一日探して見つかるか見つからないかという代物で、探索魔法を弾くなんていう厄介な性質がある。ブラックウルフの銀毛については、一匹につき一本あるのだが、死ぬと穢れてしまうので生きているウルフから抜かなくてはならない。その上昼間は黒くなっているので夜しか見分けることができないのだ。

Sランクのものがパーティで挑んでも達成できるかどうか怪しい組み合わせだ。

それを一晩でやってのけるのが、ソラなのだけれど。

「はい、受注したわ」

そういって、受注のために受け取ったギルドカードを返すと、ソラは笑みを浮かべたままギルドの出口へと歩いていった。

…そういえば、彼はいつ入ってきたのだろう？

夜のギルドにて（後書き）

説明を入れるタイミングがわからない…なんか微妙です。

そして早く仲間増やしたい…。キャラ出したい…。ユリアだって腹黒
ババアのまんま放置されていますし。

二人の苦勞

「どうしたの？」

アイスコーヒーを飲もうとコップを持ち上げたまんま口に運ぶこともせずぼーっとしていたセトはその声にはっとした。

いつの間にか隣に人が立っている。くりくりした翠の目とオレンジ色の髪。頭に生えている猫の耳は髪の毛と同じ鮮やかな色で、尻尾がぶらぶらと動いている。　ミーシャだ。元ハンターで非常に明るい性格のシルウアヌス（陸上に住む半獣）の女性。

正面に座っているパールのほうが見ると少し心配そうに見返してきた。表情はほとんど動いていないけれど、長年見続けてきたのでセトにはパールが何を思っているのかすぐにわかる。

二人が今いる所は食堂だった。魔物討伐支援ギルドの二階にあるこの場所は毎日ハンター達で賑わう。料理はとても美味しい上にギルドカードを持ってくれば二割引なので、ここで食べるものが多い。この頃は夏に向かって暑くなってきたのでシャーベットなどの冷たいメニューが増えている。

セトとパールはお昼を食べ終え、パールが頼んでいた果汁のシャーベットを食べていたところだった。パールはあまり食べるのが早くない。にもかかわらずさっさと食べ終わろうと頑張っていた。理由は簡単。周りの視線を感じたからだ。

「勧誘がしつこいんですよ」

隣に立っているミーシャに苦笑気味に言った。

テルダクに来てから一ヶ月。無事ハンターになった二人はDランクになっていた。最初はEランクだったので、1ランク上がったことになる。まだランクが低いとはいえ驚きの早さだった。そのせいかどうかはわからないが、二人はすっかり噂になった。初心者になかなか腕のいい弓使いと魔術師のエルフ兄妹がいると。実際セトの腕は良かったし、パールの魔法も技術はまだまだだが魔力量は信じ

られないほど多い。そして悪い評判もない。これは勧誘しない手はないだろうと、あらゆるパーティーやハンターギルド（ハンター同士が集まって作ったギルド。リーダーはSランク以上でないといけない）から勧誘されたのだ。

別にパーティーを組んだりするのは構わないが、組むなら自分達に合った者たちと組みたい。

ミーシャが不思議そうに瞬きをした。

「二人なら『エルセムの盾』とか大きいところからも勧誘来てるんじゃないの？」

『エルセムの盾』はSSSクラスのハンターが作ったギルドだ。メンバーが約500人いる、大規模なギルドであるが悪い評判はなく、むしろいい評判が多い。勧誘されたときの印象も確かに良かった。だが：

「断りました」

「はあっ！？なんで!？」

カツと眼を開き乗り出してくる。猫特有の縦に割れた瞳が少し獣を連想させた。シャーベットを食べ終えたパールが言った。

「生理的に受け付けない」

その言葉はミーシャを絶句させるには十分だった。瞬きも忘れて固まっている彼女を見ながらセトは口の端を少しあげる。

「それで、ミーシャさんに聞きたいことがあるのですが」

音がしそうなほど勢いよく振り返るミーシャ。セトは構わず続けた。「ソロか、パーティーのハンターで人柄のいい人を教えてください。できれば前衛がいいです」

「んなこといったって、主なところからは誘われずみでしょ？」

「主ではないのを教えてください」

「そりゃ、いないことはないけどさ…」

につこりと笑ったままミーシャを見つめる。すると無言で睨んできた。

さて、どうしたものか。さすがにミーシャはただで情報をくれる

ほど優しくはないはずだ。今こそギルドの食堂で働いていたりするが、昔はSランクまでいったハンター。少しくらい奮発しようか。

「…教えてくれたらミラクルパフェをおご」

「教えてあげるっ！」

ちなみにミラクルパフェとは原材料不明のとにかく甘く、それなりに高い値段のパフェである。ついでに言うと巨大だ。

ミーシャは甘党で、その胃袋の大きさは未知数であった。

セトもパールも食べたことはない。セトは甘いものは余り好きではなかったし、パールはミラクルパフェを食べられるほど大食いだはない。ただ、食べた人の話ではありえないほど甘く、何か飲み物がないととてもじゃないが食べきれないとか。…ミーシャはそのまんま食べきって見せそうだ。

ミーシャはほんの少しだけ躊躇ってから、話し始めた。

「…ギルド員の中で有名な“夜の少年”って呼ばれてるハンターがいるの」

「少年？」

パールが呟く。

「そう、少年。16歳でSランクの凄腕剣士なの。その上美少年だね、そこら辺の女よりもよっぽど美人。しかも赤と紫の綺麗なオッドアイなのよ」

…途中から見た目の話になっている……。

「そんな人が何故噂にならないんですか？」

話を聞く限りでは腕も確かで見えた目も目立つ、16歳にしてSランクのハンターと言うことになる。それなのにセトはその少年の事をちらりとも聞いたことがなかった。

ミーシャが嫌そうな顔になる。

「…そ、それがねー、彼、夜にしか来ないの。クエストも夜のしかしてないみたいだし…その上ギルド長と面識あって、あんま情報流さないでーって頼んでるんだよねギルド側としても彼は溜まった夜のクエストを消化してくれるハンターだからさー、極力情報流さな

いようにしてるんだよねー…」

ミラクルパフェ一個で話してもらえましたが…

突っ込みはしないがパールも同じように思っているようだった。

そしてその顔には別の感情もあった。好奇心。あるいは興味か。

実力もあり、人柄も…多分大丈夫だ。夜のクエストばかりやって
いるというのが気になるが…まあ、そこは気にしなくてもいいだろ
う。

なにより、パールが気にしている。それだけで会ってみる価値は
あるだろう。

「どこで会えますか？」

するとミーシャが不満そうに唇を尖らせた。

「ええー会うの？夜ばかり言うのはちょっときついんじゃない
い？」

それに対してセトは微笑みながら応えた。

「第一条件は“パールが組みたくないと思わない相手”ですから

「……甘やかしすぎでしょー…」

パールがセトを見る。セトは涼しい表情であっさりと言った。

「妹思いといってください」

つまりはシスコンってことじゃないか。

ミーシャが内心でこう思ったのは秘密である。

二人の苦勞（後書き）

ミラクルパフエの原料についてはいつか語れたらいいなと思います。間違っても一人で食べきるもんではありません。口の中が甘すぎて死ぬ…そんなイメージです。

エルフ兄弟は後衛ばかりだから距離を詰められたら大変だろうなー、よくDランクに上がったなーとか思ったり思わなかったり。

第一印象

その日の夜、セトとパールはギルドの二階の食堂にまた来ていた。もちろん、ソラというハンターに会うためである。早寝の習慣のせいかパールは少し眠そうだ。エルフは一日一時間寝れば十分なのだが、この時間に寝るのがすっかり癖になっている。

魔物討伐支援ギルドは他の建物とは違い夜でも明かりをつけたままであったがやはり昼の賑わいが嘘のようで、食堂には片手で数えられるほどの人数しかおらず、一階には受付のギルド員以外誰もいない。ミーシャは食堂で待っていたらソラに会えるといっていたが、まだそれらしき人物は見当たらなかった。少年といえそうな人物は食堂のカウンターでグラスを拭いているギルド員くらいだ。年齢は一致しているが、髪の毛の色がそもそも違う。ソラの髪の色は見事な黒だとミーシャが言っていた。ミーシャにいつ頃来るのかも訊いておいたほうが良かったかもしれない。

仕方ないから適当に座って待っておこうか　セトがそう思ったとき、静かな空間に声が響いた。

「初めて見る顔だね」

澄んでいて、何処か中性的な声。それが自分にかけられた言葉だと気が付くのに少し時間がかかった。慌てて振り返ると目が合った。「夜来る人には一杯奢ることにしてるんだ」

パールがてくてことその声の主のほうへ向かう。

カウンターの少年だった。先ほどは暗くて気が付かなかったが、こうやって見ると不思議な特徴を持っている。いったい何族なのだろう、ひとつにまとめられた髪は鮮やかな水色と濁った灰の色が混じっている。肌も水色が濃く、その下から透けるように橙と赤の色が出ていた。大きめの垂れ眼で、髪と同じ色の短い睫毛の下の瞳はオッドアイで湖面を想わせる蒼と、暗い紺。基本的な形は人族そのものだが、微かに水の気配を纏っていて違和感をぬぐえない。

「綺麗……」

パールが思わず、といった様子で呟く。すると少年はほんの少し目を見張った。そして照れたように笑う。

「そう言ってくれたのは君で二人目だ。名前を聞いてもいいかな？」
パールが自分を指差して言う。

「パール」

「兄のセト・ヴァティーです」

視線を向けられて、セトも名乗った。パールが何の抵抗も見せず
に近寄るなんて珍しい。それだけでとりあえずは悪い人ではないだ
ろう。

少年も嬉しそうに名乗る。

「ここの食堂で働いてる、シスイだよ。マスターって呼んでくれる
と嬉しいな」

「マスター、ですか？」

尋ねると、シスイはふふ、と笑った。まるで子供のようだ。

「かっこいいじゃない、バーのマスターって」

パールがカウンターの前の椅子に座る。そしてセトのほうをじっ
と見つめてきた。…座れということだ。隣の椅子に腰を下ろす。そ
れを見てパールが満足そうに頷いた。

開け放たれた窓から冷たい風が吹く。夜に窓を開けているのもこ
だけだろう。夜は基本的に恐れられている。エルフは恐れている
わけではないが、夜のほうが厄介なモノが多いのも知っていた。

パールがカウンターの奥にあるビンを一通り見回してから言う。

「マスター、ココア、ある？」

もしセトが飲み物を飲んでいたら、盛大に嘔き出していただろう。
ココアの原料であるカカオはシルウアヌスのある部族が栽培してい
るのだが、売り出される量がとにかく少なくとも高価なのだ。こ
の間ミーシャにカカオの素晴らしさについて語られてから気になっ
ていたのだろう。だが、さすがに奢ってもらえるような物では

…「ありますよ。温かいのでいいですか？」

「うん！」

あたりまえのように言うシスイと、笑いかけるパール（セト視点^{シムン}）
。セトの思考が一瞬停止した。

大丈夫なのか、そんな高いものを奢って…。

セトの内心なんて露も知らず、シスイが振り返る。

「セトさんも何かリクエストは」

そこまで言っただけ、と口をつぐんだ。明らかに不自然だ。セトが訝しんでいるとシスイはパツと表情を変える。

「…そういえば今日の昼ミーシャと何か話してましたよね」

それを訊いた途端、セトの警戒心がもたげた。何故それを知っている？

顔に出したつもりはなかったのだが、セトの顔を見てシスイが苦笑した。

「水と風の精霊と相性がいい種族なもので。それで探し物は彼ですか？」

その視線がセトとパールの後ろのほうを向いていることにセトはやっと気が付いた。慌てて振り返って見たのは鮮やかな赤と紫の瞳

「やー、ソラ。今日は少し遅かったね」

シスイの緩い声が登場違いに響いた。

第一印象（後書き）

うええええ……短いし流れおかしいですね。

シスイ君は結構設定があるのですが本編で出てくるかどうか……

あああ、文才が欲しい。書き方も安定してないし……

ちなみに服装の描写が出て来ない人は基本的に服が決まってないもしくはそんなに重要じゃない人です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3174t/>

壮麗の月

2011年9月24日03時15分発行